ともに「居場所」をつくること

大　池　容　子（演劇学科助教）

「居場所」というテーマで寄稿の依頼を受けたとき、真っ先に思い浮かんだ題材は「喫煙所」だったのだが、大学の図書館の広報誌に掲載する内容として相応しくないだろうと、すぐにその考えを引っ込めた。そして「さあ、なにを書こうかな」と異国の街を一望できる喫煙所で考えを巡らせる。今年の10月23日から11月21日まで、私はトルコのアンカラにあるビルケント大学演劇学科の学生たちとともに作品を創作・上演する国際交流基金のプロジェクトに参加していた。

一昨年、主宰する劇団・うさぎストライプの公演動画が、国際交流基金によるオンライン配信プロジェクト「STAGE BEYOND BORDERS」で配信された。その配信をきっかけにトルコの国立劇場の方が興味を持ってくださって、初めての海外公演が実現しかかったのだが、担当者が変わったためにその話は白紙になってしまった。意気消沈していたところに、国際交流基金の方から「一度、トルコに視察に行きましょう」と声がかかった。2024年は日本とトルコの外交樹立100周年。国立劇場での上演は白紙になってしまったが、トルコの演劇人と周年事業として国際共同制作を実施できないか、ということだった。そうして私は、昨年の秋、初めてイスタンブールとアンカラに出向いたのだった。

まったく言葉が分からない中、小劇場で上演されているものを中心に一週間で５作品の演目を観た。それ以外にも劇場のオーナーとの意見交換や、演劇祭のプロデューサーとの会合、土日（とにち）基金で実施された日本語弁論大会の見学など、盛り沢山の滞在だった。そんな中で、アンカラの雑居ビルの一室で即興劇を上演していたカンパニーのことが印象に残っている。観客からお題をもらって、即興で短いエチュードを俳優たちが次々に披露する形式だったのだが、客席で観劇していると突然、舞台上の俳優から「あなたたちの国で、いちばん有名なスポーツはなに？」と声をかけられた。戸惑いながらも「野球です」と答えると、「トルコで野球はそんなにメジャーじゃないんだ。ちょっとやってみてよ！」と、私たちは舞台に上げられてしまった。同行してくれた国際交流基金の担当者の方と、うさぎストライプの劇団員とともに即興で野球のエチュードを披露したのだが、いま思い返しても、なかなか上手くやれたんじゃないかなあ、と思う。「他者となにかをつくる」という、演劇の根源的な楽しさを感じる出来事だった。

そして最後に私たちは、演劇学科を持つトルコの大学を２つ訪問した。そのうちの１つがビルケント大学だった。教授たちは私たちを快く迎え入れてくれて、とんとん拍子に話が進み、その日のうちに演劇学科の学生たちを紹介された。毎年、海外の演出家を迎えて作品づくりを行なっているのだという。今年の９月、再びアンカラに滞在し、学内オーディションを実施した。トルコ語に翻訳された自分の台本を学生たちが演じているのを見て、なんだか不思議な気持ちになった。と同時に、「きっといいものになるだろう」という予感がした。

ビルケント大学の学生たちと創作に取り組むことになったのは2022年に初演を行った『かがやく都市』という作品だ。住む人がどんどんいなくなっていく街に暮らす人々を描いた群像劇だが、物語の軸となるのは“宇宙人”の兄妹である。彼らの頭にはアンテナのような銀色の触覚が生えており、テレパシー

を使って会話する。居場所のない彼らは、周囲から「あいつらは“宇宙人”だから」と異質なものとして扱われており、妹はいつかUFOが自分を迎えに来てくれるのではないかと、空に向かって両手を掲げる。だが実はこの兄妹は、本当は宇宙人ではない。必死に人間のふりをしている宇宙人のように、周囲から理解されないマイノリティな存在をこの作品で描きたかった。

『かがやく都市』フライヤー

ビルケント大学は、学部では34、大学院では51の学位取得コースがある。すべてのキャンパスが一つの場所に集約されており、敷地面積は約200平方キロメートル。敷地内には学生寮やスーパーマーケット、カフェなどがあって、学外に出ることなく生活することができる。私も大学内のゲストハウスでおよそ一ヶ月間暮らすことになった。はじめは、洗濯機の使い方が分からなかったり、トイレットペーパーだと思って買い込んだものがキッチンペーパーだったり、量り売りの野菜の買い方が分からなかったりと、宇宙人が知らない星を彷徨うような感覚で右往左往しながら日々を過ごしていた。しかし一週間ほど経つとスーパーの店員さんが顔を覚えてくれたらしく、「どこから来たの？」と話しかけてきた。片言のトルコ語で「日本からです」と返すと、「そうなんだ、ようこそアンカラへ！」と笑顔で言われ無性に嬉しくなった。それ以来、スーパーで目当ての商品が見つからないときは諦める前に店員さんに聞くようにし、カフェなどでの注文も積極的にチャレンジするようになった。場面場面で必要な言い回しやルールを覚えながら、少しずつ異国での生活に馴染んでいく。普段、日本では意識することのなかった日常の営み一つ一つが、なんだか特別なものに感じられた。

『かがやく都市』は［高校の教室］［工場］［公園］という、三つの場面から構成されている。ただ舞台美術は必要最低限で、台詞や俳優の動作によってシームレスに場面が変化する。トルコの学生たちは「そういった演出に私たちは馴染みがない、観客は混乱すると思う」と懸念していた。私は「初めからすべてを説明する必要はない、だんだんと観客にこの作品のルールを分かってもらおう」と彼らに伝えた。学生たちの質問は、日本で作品をつくっているときには意識していなかったことを改めて考えさせてくれた。そしてディスカッションのためにそれを言語化することが私にとっての大きな学びになった。短い創作期間ではあったものの、学生たちとのディスカッションの時間を長く設けたことによって、作品の内容はもちろん、創作の「場」が豊かになったと感じる。

『かがやく都市』舞台写真①

『かがやく都市』舞台写真②

ビルケント大学での上演は、プレビューを合わせて全４公演。有難いことにすべての回が満席となり、12月には追加公演が決定した。学生たちも観客の反応に手応えを感じたらしく「もっとやりたい！」と言ってくれた。千秋楽を見届けることはできなかったが、もうこの作品は彼らに託して大丈夫だ、と感じた。ホッとしたような、でも少し寂しいような気持ちだった。日本に帰国する直前、学生たちが稽古場にお菓子や食べ物を持ち寄って簡単なパーティーを開いてくれた。学生の一人がトルコの伝統的な音楽を流して「トルコの結婚式では、この曲に合わせてみんな踊るんです」と言って、私の手を引いた。私は、見よう見まねで彼らと一緒に踊った。

演劇は、公演ごとにスタッフやキャストが集まり、ひとつの座組になる。時間をかけてお互いのことを知っていき、それぞれが自由に試行錯誤できる「場」をつくっていく。そして千秋楽を迎えると、その座組は解散する。一ヶ月や二ヶ月などの短い時間であっても、公演が終わる頃には「もう、みんなと毎日会えないのか」と寂しく感じてしまう。私にとっての「居場所」は創作を共にする仲間と毎回つくりあげていくものだ。それは必ず終わりが来るが、つくりあげていく過程にいつも気付きがあり、成長をもたらしてくれる。

いま、私は日芸の演劇学科の学生たちと、舞台総合実習Ａ２の稽古に取り組んでいる。演目は、2014年に初演を行った『空想科学』という作品だ。それぞれの幸せを追い求める人々と、時代とともに変化していく街の物語である。まさに「場」づくりの真っ最中だが、日芸の学生たちと新たな「居場所」をつくりたいと考えている。

ビルケント大学の学生たちと